The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	禁止と奨励 ： 太宰治『右大臣実朝』
Author(s)	滝口，明祥
Citation	太宰治スタディーズ. 2016, 6, p. 62-81
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/57180
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

禁止と奨励

――太宰治『右大臣実朝』

滝口明祥

キーワード：太宰治　右大臣実朝　検閲　噂　戦争

その男は滔々と一人で語り続ける。一人で？　いや、むろん聞き手はいる。「おたづねの鎌倉右大臣さまに就いて、それでは私の見たところ聞いたところ、つとめて虚飾を避けてありのまま、あなたにお知らせ申し上げます」と言っているのだから。だが、聞き手の反応は何も示されない。相槌を打っているのかどうかさえ定かではない。聞き手は最後までこの男の話を聞いているのかどうか、という疑いさえもがそのうち私たちの胸には兆してくるだろう。だいたい、聞き手はなぜこの男の話を聞こうとしたのだろうか。この男の語りは一息になされたものなのか、それとも何度かのインターバルを挟んでなされたものなのか。それらの情報は何も示されない。ただ、この男の語りだけが示される。いや、むろんそういう言い方は正確ではない。この男の語りの合間には「吾妻鏡」の本文が差し挟まれているのだから。だが、だからと言って事態がそれほど変わるわけでもない。この男がなぜ語っているのか、どのような状況で語っているのか、それらは依然としてわからないままなのだ。

太宰治『右大臣実朝』（一九四三、錦城出版社）は実に異様な作品である。「私」は、誰かの訪問を受けて語りだす。かつて、実朝の近習であった過去を。語りの現在から約三〇年前に一二歳だった「私」が実朝の近習となった時点から、実朝が公暁に暗殺されるまでの一一年間を。聞き手がどのような目的で「私」の語りを聞き出そうとしているのか定かではない以上、「私」の語りの意図も不明なままだ。ただあるのは、「私」の語りの断片と、「吾妻鏡」など古文書の断片だけなのだ。それらは明確な位置づけがなされないまま、ただ浮遊しているかに見える。明確に意味づけられることを拒否しているかに見える断片たちを前にして、私たちにいったい何ができるだろうか？　そうした戸

惑いを起させるようなものを、ここではさしあたり異様さと呼んでおこう。だが、先行研究においてはそうした異様さはそれほど深刻に受け止められてはいないようである。

たとえば、吉本隆明は次のように述べている。

太宰の『右大臣実朝』は、ひとくちにいえば太宰の中期における理想の人物像を実朝に託したものといっていい。「駆け込み訴え」にはっきりと描かれているように、太宰の中期の理想像はキリスト・イエスであった。そして実朝にはキリスト・イエスにあたえた人物像をほとんどそのまま再現したといってよかった。〔…〕もちろん太宰治の実朝像は「吾妻鏡」からうかがえる実朝像を極度に拡大してみせたものであった。だから実朝と北条氏時政あるいは義時とはじっさいは反目などはなく、よく心得え了解しあったものどうしの主従であった、というところまで解釈を拡げてみせなければならなかった。陰険な策謀のできる北条氏にたいして、いささかでも冷たい暗黙の反感をしめす実朝を描くとすれば、おそらく実朝の実像にはちかくなったかもしれないが、太宰治の理想の人間像にはかなわなかったのである。心得てだまされながら悠然としていられる人物、裏切られても悄げかえらないで、平気で滅亡できる人物が、太宰のひそかに願いつづけた自我像であったといってよい。[1]

つまり、「私」が語る実朝像をそのまま太宰にとっての実朝像と同一視し、それを太宰の「理想像」、「ひそかに願いつづけた自我像」に結びつけるという、きわめてナイーブな受け止められ方がされていたのである。さすがにその後は語りのあり方、つまり「このようにして浮かび上がる実朝像が、じつはこれを熱愛する一人称の語り手の視野の中にのみ存在しており、したがってまた、これを自由に相対化しうるという仕掛け」[2]にも注目が集まるようになったが、それらにおいても「私」の語りの〈意図〉は明白なものだとされているようだ。要するに、「私」が「実朝を全面的に信頼し、理想化し、一種の超越者として語ろうと」[3]していること自体は疑われていない。だが、本当にそうなのだろうか？

本稿は、『右大臣実朝』の語りのあり方について検討する。それは従来思われている以上に複雑なものなのであり、そして作品が置かれていた同時代の言説のあり方とも――同時代言説それ自体とではなく――呼応していることだろう。そのような検討を経ることによって初めて、この作品が同時代において持っていた〈意味〉もまたほの見えてくるようになるに違いない。

一、表層／深層

作品の冒頭と言っても差支えなさそうな箇所で、「私」は実朝をめぐる言説について、次のような感想を述べている。

人によつて、さまざまの見方もあるでせうが、私には、ただなつかしいお人でございます。暗い陰鬱な御性格であつたと言ふひともあるでせうし、また、底にやつぱり源家の強い気象を持つて居られたと言ふひともございませう。文弱と言つてなげいてゐたひともあつたやうでございますし、なんと優雅な、と言つて口を極めてほめたたへてゐたひともございました。けれども私には、そんな批評がましいこと一切が、いとはしく無礼なもののやうに思はれてなりませぬ。

「私」は実朝に対する一切の「批評」を――その評価の高低に関わらず「批評」すること自体を――「いとはしく無礼」だとするのだ。「私」にとっては実朝をただ「ありのまま」に感受することこそが望ましいのであって、そうすれば自ずと実朝の素晴らしさは感得されるであろう。どうやら「私」が主張しているのは、そのような帰依の姿勢とでも言うべきものであるようなのである。

そして上記のような「私」の見解は、実朝の和歌に対して最も厳格に適用される。すなわち、「私」は「将軍家のお歌は、どれも皆さうでございますが、隠れた意味だの、あて附けだの、そんな下品な御工夫などは一つも無く、すべてただそのお言葉のとほり、それだけの事」なのだというのだ。たとえば「タマクシゲ箱根ノ水海ケケレアレヤ二クニカケテ中ニタユタフ」という和歌を、「将軍家が京都か鎌倉か、朝廷か幕府かと思ひまどつてゐる事」を歌っているなどと解釈するのは明確に誤りなのであって、これは相模と伊豆にまたがって海が広がっている様をただそのままに歌ったものでしかないのである。

つまり「私」は、和歌を比喩的に解釈することを拒否し、字義通りに受け取ることを求めているのだ。それは言い換えるならば、いたずらに深層を探るのではなく、表層のみを見よ、ということでもあるだろう。「何もかもそつくり明白にそのお歌に出ている」のだから「御苦労の御詮議」をする必要もないのであり、「将軍家のお歌はいつも、あからさまなほど素直で、俗にいふ奥歯に物のはさまつたやうな濁つた言ひあらはし方などをなさる事は一度もな」いのである。むろん、それは和歌のみには限られない。

北条義時（相州）が年来の郎従のうち特に功労のあった者を侍に引き上げたいと願い出たとき、実朝はそれを拒否する。郎従から侍になった者の子孫はもっと上を望むようになるだろう。そうなれば、秩序が混乱する元となるというのだ。「私」はそうした実朝の主張について、次のように述べる。

それも決して将軍家が相州さまに対して御自身の怨をはらさうなどといふ浅墓なお心からではなく、ただ正しい道理を凜然と御申渡しになつただけの事で、その事に就いては、前にも幾度となく繰返して申し上げましたが、将軍家の御

胸中はいつも初夏の青空の如く爽やかに晴れ渡り、人を憎むとか怨むとか、怒るとかいふ事はどんなものだか、全くご存じないやうな御様子で、右は右、左は左と、無理なくお裁きになり、なんのこだはる所もなく皆を愛しなされて、しかも深く執着するといふわけでもなく水の流れるやうにさらさらと自然に御挙止なさつて居られたのでございますから、その日、相州さまに仰せられたことも、ほかの意味など少しもなく、ただ、あの御霊感のままにきつぱりおつしやつただけのことと私は固く信じて居ります。

実朝の言動に隠された〈意図〉を探ることを、「私」は拒否する。「私」によれば、義時の願いを撥ねつけたのはただ「御霊感」によって「正しい道理」を述べただけのことで「ほかの意味など少しもな」いのだ。むろん、「私」も実朝の言動に疑問を感じることがないわけではない。しかしそんな場合も「そのやうな事こそ凡慮の及ぶところではないので、あのお方の天与の霊感によつて発する御言動すべて一つも間違ひ無しと、あのお方に比すれば盲亀にひとしい私たちは、ただただ深く信仰してゐるより他はございませんでした」とされるのである。隠された〈意図〉などはないのであって、それはあくまで「天与の霊感」によるものなのであり、それに対してはあれこれと推測することなどせずにただ「信仰」するしかないのだ。

だが、この時点ですでに「私」の主張に綻びが見えていることは明らかだろう。「私」は実朝のことを「初夏の青空の如く」、「水の流れるやうに」と形容する。他の場面では幾度か「天衣無縫」であるとも述べている。比喩的解釈よりも字義的解釈を上に置く「私」の主張の前提にあるのは、まさに比喩的思考なのである。[4] 実朝は「初夏の青空」や「水」に喩えられることによって、自然そのままの存在へと変貌を遂げる。それは浅薄な〈意図〉などに毒されてはいない。言うならば、「私」にとって、実朝は存在自体が詩なのである。「私」が和歌の比喩的な解釈を拒否していることをもって、非文学的な思考の持ち主であると考えるのは当たらない。逆なのだ。実朝を「天衣無縫」な存在へと持ち上げる「私」の所作こそ、（最も悪しき意味での）文学的な行為と言うほかないではないか。最も豊かに詩を味わい得るためには、考えるのではなく感じなければならない。「私」はあたかもそのように言おうとしているかのようである。

「私」の実朝賛美が比喩的思考に支えられているのは、たとえば、「私」が疱瘡によって様変わりした実朝の顔について、次のように述べる場面からも明らかだ。

本当に、私たちも、はじめはひどく面変りをしたと思つてゐたのでございますが、馴れるとでも言ふのでせうか、あのお方がだいいち少しも御自身のお顔にこだはるやうな御様子をなさいませぬし、皆の者にもいつのまにやら以前のままの、にこやかな、なつかしいお顔のやうに見えてま

ゐりました。お心の優れたお方のお顔には、少しばかりの傷が出来ても、その為にかへってお顔が美しくなる事こそあれ、醜くなるなどといふ事は絶対に無いものだと私は信じたいのでございますが、でも、夜のともしびに照らされたお顔には、さすがにお気の毒な陰影が多くて、それこそ尼御台さまのお言葉ではないけれども、もとのお顔をもいちど拝したい、といふ気持も起つて思はず溜息をもらした事も無いわけではございませんでした。けれども、そんな気持こそ、凡俗のとるにも足らぬ我執で、あさはかの無礼な歎息に違ひございませぬ。

「私」の実朝賛美は、疱瘡によって様変わりした実朝の顔を見ないことによって成立している。比喩的解釈よりも字義的解釈を、あるいは深層よりも表層を重視する「私」は、しかしその根本のところで字義的解釈を、あるいは表層を見ることを拒否しているのだ。そうすることによって、「私」の目の前には、「美し」くて「天衣無縫」な実朝が出来することとなる。

ただし、そのように言ってしまったとき、いささか釈然としない思いに捉われてしまうのは、たとえば右に引用した部分においても「私は信じたいのでございますが」という言い方で実は自身の主張が客観的なものではないということをことさらにあからさまにしたり、その主張を裏切るかのような「思はず溜息をもらした事」にまで言及したりするなど、単純な実朝賛美とは異なる要素が「私」の語りの端々から透けて見えてくるからだ。

はたして「私」は、何を語ろうとしているのだろうか？　その語りの〈意図〉とは、それほど単純なものではないのかもしれない。

二、禁止／奨励

「私」は聞き手に対して、深層を探ることを禁止する。隠された〈意図〉、あらわではない深い〈意味〉、そんなものは初めから無いのであって、探っても無駄なのだと。

「私」は実朝に対してだけではなく、義時に対しても、当初は「裏も表も何もなく、さうして後はからりとして」いる「竹を割つたやうなさつぱりした御気性のお方」だとしていた。ただ、「下品」であることが欠点であるだけなのだと。つまり、義時もまた深層を探る必要のない人物として「私」の語りのなかに現れていたのである。

だが、和田胤長の助命嘆願に和田義盛たちが来た場面においては、「私」の語り口は微妙に変化している。

さて、その時に、広元入道さまの息せき切つての御注進を将軍家は静かに御聴取になり、うつむいてしばらくお考への御様子でございましたが、やがて、ふいとお顔を挙げ何か言ひ出さうとなされた途端、

「おゆるしなさいますか。」

とお傍に居合せた相州さまが、軽く無雑作におつしやつたのでございます。その一言には微塵も邪念がなく、ただぼんやりおつしやつただけの言葉のやうでありながらも、末座の私どもまで、なぜだか、どきんとしたほどに、無限に深い底意が感ぜられ、将軍家に於いてもその一言のために、くるりとお考へが変つた御様子で、幽かにお首を横にお振りになつてしまひました。

表層においては「軽く無雑作におつしやつた」だけのようでありながら、しかし「無限に深い底意」があるように感じられる。「私」の語り口は微妙である。「私」は義時には探るべき深層があると言っているわけではない。実際にはないのだけれども、深層があるように思えてしまうと言うのだ。しかし「どうも相州さまがなさると何事によらず、深い意趣が含まれてゐるやうに見えて来るものですから」などと繰り返し義時の深層の可能性に言及する「私」の語り口によって、あるかどうか定かではない深層へと聞き手や読者の視線は否応なく誘われていかざるをえないだろう。

あるいは、大江広元という人物の性格が後半においてクローズアップされてくるのも、そうした「私」の語り口の変化と関わっているに違いない。決して自らの本心を口にすることはせず、常に「遠まはしのあいまいな言ひかた」のみをすることによって「鎌倉一の大政治家」たりえる存在。それこそが大江広元に他ならないわけだが、そのような人物がクローズアップされてくるとともに「政治」というものの存在が「私」の語りの背後に確固とした存在感を見せてくるようになるだろう。「私」は当初、「巷間に言ひ伝へられてゐるやうな陰鬱な反目」が実朝の周辺にあった、「反目嫉視陰謀の坩堝だつた」などという噂をかたくなに否定していた。だが、後半に差し掛かると「私」も「どこやら奇妙な、おそろしいものの気配が、何一つ実体はないのに、それでもなんだか、いやな、灰色のものの影が、御ところの内外にうろついてゐるやうに思はれ」、「その不透明な、いまはしい、不安な物の影が年一年と、色濃くなつて」きたと語るようになるのである。

「私」によれば、「故右大臣さまのお小さい御時分から、どういふものか右大臣さまを贔屓で」あったという義時が「どうしたものか、さらに後にいたつては少し御様子がお変りになりましたやう」だと言う。なぜか。「当将軍家の比類を絶した天稟の御風格が、さすがの相州さまのお手にもあまるやうになつて来たからではないか」、というのが「私」の推測である。「私」はそれを「下賤の愚かな思案」と卑下することを忘れないが、しかし実朝が親裁を開始し、徐々に権力を身に着けていくことによって、両者の関係が緊張を孕むようになっていったということは容易に推測できるだろう。[5] その意味で、『右大臣実朝』という作品が承元二（一二〇八）年から開始されているのは、まこ

とに意味深いと言わざるをえない。その年は実朝が疱瘡にかかる年であるとともに、実朝が親裁を開始する前年に当たるのだ。いわば、実朝が権力を身につける直前からスタートし、政子や義時、広元から独り立ちしていく時期をこの作品は対象としているのであり、その時期に何らかの政治的な確執があったことは「私」の語りからも推測できるようになっているのだが、「私」自体はあくまでそうした政治性を否定し続けるのである。――少なくとも表面的には。

もちろん、実朝が和田義盛を寵愛するようになったのも、そうした幕府内の微妙な権力関係と無縁ではないだろう。「私」はさりげなく、「まことに生憎のもので、この御寵愛最も繁かりしその翌年、あの大騒動にて御一族全滅に相成りました」と述べている。ここでも「私」の語り口は微妙である。和田合戦によって和田氏が滅亡したことと、実朝の寵愛とが隣接しているのは単なる偶然であり、そこには深い〈意味〉など無いのだと「私」は言おうとしているかのようだ。だが、聞き手や読者の視線は、けっしてあらわには浮かびあがってこない両者の結びつきを示しているだろう深層へと誘われてしまうしかないではないか。

和田合戦後の実朝と義時の関係について、「私」は次のように語る。

> 相州さまも、〔…〕将軍家に対しては、また別段と、不自然に見えるくらゐに慇懃鄭重の物腰で御挨拶をなされ、将軍家もまた、以前にくらべると何かと遠慮の、お優しいお言葉で相州さまに応対なさるやうになり、うはべだけを拝見するとお二人の間は、まへにもまして御円満、お互ひにおいたはりなされ、お睦げでございまして、〔…〕

「うはべだけを拝見すると」という言葉は、「うはべ」とその底にあるものとの乖離を強く示唆する。つまり、ここに至って「私」は、表層とは違う深層があることをあからさまに認めてしまっているのである。さらに「私」は、「心ならずもその寵臣の一族を皆殺しにしてしまつた主君の御胸中は、なかなか私どもには推察できぬ程に荒涼たるものがあるのではございませんでせうか」とまで言い出す。つまり、「私」はもはや積極的に実朝の「御胸中」、すなわち表層からは窺い知れない隠された〈意図〉を探ることを聞き手に求めているのだ。

結局のところ、「私」は深層を探ることを禁止しつつも、実はひそかにそれを奨励しているようにも思われてくるのである。「私」は「相州さまと入道さまとは、互ひにちらりと、けれども鋭く眼くばせをなさいました」とか、「尼御台さまは、すつと細い頸をお伸ばしになり素早くあたりを見廻しました」とかいう、ささやかでいて意味ありげな動作を何度か描写しているが、それらを決して意味づけようとはしないのだ。むしろ、そこには隠された〈意味〉などないのだと「私」は主張する。だが、それならなぜそのような動作をわざわざ描写する必要があるの

か。描写したうえで意味づける。あるいは、意味づけないので描写もしない。そのどちらかであるのならばわかる。だが、「私」が行なっているのは、そのどちらでもなく、わざわざ描写したうえで意味づけないということなのだ。そうすることによって、聞き手や読者の視線はやはり深層へと誘われていかざるをえないだろう。

「私」の語りが、しばしば前後で矛盾することを述べていることについても、合理的な説明は難しい。たとえば、泉親平（親衡）の乱の際、実朝が謀反加担者を幾人も赦免したことについて「私」は当初、「お傍で渋いお顔をなさつてゐる相州さまに対してお気がねなさるやうな事もなく、まことに天衣無縫、その御度量のほどは私どもにはただ不思議と申すより他はございませんでした」と絶賛していた。だが、そのしばらく後では同じ行為について、「まるで御冗談のやうに矢鱈に謀逆の囚人たちを放免させてお笑ひになつてゐるかと思ふと、急にがくりとお疲れの御様子をお示しになつたり」と、まるで同一人物が発していると思えない言葉を述べるのである。

この矛盾について、森井直子は「実朝を優れた人物と意味づけようと意図して語りを行なってきた近習は、語りの途上で思いがけず、両義的な実朝に出会ってしまう」のであり、「実朝を回想しながら、近習は、自らの語る内容に自ら反応し、実朝評価を更新している」のだと解釈している。[6] だが、それならば、自身が以前に述べていた見解に言及くらいしてもいいのではないだろうか。あたかも「私」は、自身が以前に述べていた見解など完全に忘れてしまったかのように、それとは全く相容れない意見を平然と述べるのである。字義的に読むのならば、「私」は分裂しているとしか言いようがないだろう。そもそも、「私」は約二〇年のあいだ、実朝について、あるいは実朝が置かれていた状況について、幾度も思い返してみはしなかったのだろうか。聞き手に語っているうちに、それまでの約二〇年間わからなかったことが急にわかってくるなどということが、果たしてありえるだろうか。

「私」の語りは、特に「私」と公暁が対話する場面以降は、実朝賛美からはほど遠いトーンを帯びるようになる。公暁は次のように実朝を語る。それは、「私」の語りに現れていた実朝像とは違う実朝に他ならない。

> 「〔…〕将軍家といふ名ばかり立派だが、京の御所の御儀式の作法一つにもへどもどとまごつき、ずんぐりむつつりした田舎者、言葉は関東訛りと来てゐるし、それに叔父上は、あばたです、あばた将軍と、すぐに言はれる。〔…〕野暮な者ほど華奢で繊細なものにあこがれる傾きがあるやうだが、あの人の御日常を拝見するに、ただ、都の人から笑はれまいための努力だけ、それだけなんだ。〔…〕」

それまで「私」の語りが少なくとも表面的には見ないように

していた実朝の顔をあっさりと「あばた」と表現する公暁は、「ずんぐりむっつりした田舎者」、「野暮な者」として実朝を語る。そして政子や義時が実朝のことを「気違ひだの白痴だの」と言っていることをも述べるのだ。ここにきて「私」が実朝に対して述べていた「天衣無縫」という言葉は、「気違ひ」や「白痴」という言葉への反転可能性を帯びるに至るのである。

以降の「私」が語る実朝の姿は、それまでとは明らかに異なるトーンに包まれている。「そのとしも、また翌年の建保六年も、将軍家の御驕奢はつのるばかり」であり、「もろもろの御仏事に当つてさへ、ほとんど御謙虚の敬神崇仏の念をお忘れになつていらつしやるのではないかと疑はれるほど、その御儀式の外観のみをいたづらに華美に装」い、また左近衛大将拝賀の儀式のために「関東の庶民は等しくその費用の賦課にあづかり、ひそかに将軍家をお怨み申した者も少からず」出たにも関わらず、実朝はいっこうに気にせず、また豪華な儀式を行なったので「いまはもう、御家人といひ土民といひ、ほとんどその財産を失ひ、愁歎の声があからさまに随処に起る有様」なのだ。もはや実朝は名君どころか庶民を苦しめる暴君としての姿を現していると言ってよい。

それまでの「私」は実朝に関するさまざまな噂を紹介しながら、それを否定してきた。しかしながら、「私」の実朝賛美がもはや維持できなくなったラストの場面から遡及的にそれらの噂が再び読者の胸に浮上してくるだろう。木村小夜が「幾つもの解釈があり得ることをとりたてて読み手に知らせておいてからそれを語気強く否定すれば、読み手の目はむしろそれらの解釈の方に向けられてしまう」[7]と指摘しているように、「私」が否定してきたさまざまな噂は、読者の胸に強く印象づけられていたはずだ。そして、もはやあからさまに正統性を失った「私」の解釈が他の実朝に関するあらゆる噂と同じ位置に並べて置かれることによって、一義的な像には収まりきらない多様な実朝像が創出されていく。

「私」が語る実朝像については、それが正当なものなのかどうか疑わしいという疑問がこれまでもたびたび呈されてきた。当然の指摘ではあるが、問題は、そうした「私」の語りの疑わしさが異様なほどにあからさまにされていることのほうなのではないか。だが、そうした「私」の語りのあり方について、考察が深められているとは言いがたい。たとえば、『右大臣実朝』に〈矛盾・亀裂＝逸脱の言説〉を見出す権錫永は、「私」が語る説が信用できないので「伝達される様々な情報を再構築していくことが必要となってくる」として、〈規格化の要素〉（＝実朝、天皇制）と〈逸脱の要素〉（＝相州、反天皇制）とに分けて分析しているが、そのとき「私」の語りのあり方は背後に置き忘れられてしまっているのではないか。[8]

重ねて問う。「私」の語りの〈意図〉は、はたしてどこにあるのか？　しかし、そのことについて考えてみるためには、この作品が書かれた時代へといったん迂回しなければならない。

三、戦時下の噂と検閲

『右大臣実朝』という作品においては、おびただしい噂が渦巻いている。それらの正しいかどうか定かではない噂たちは、「私」の実朝賛美、そして実朝と義時とのあいだの政治的確執の否定といった主張を相対化する可能性を秘めながら、作品全体に不穏さを醸し出し続けるのだ。

そして実は、『右大臣実朝』という作品が書かれた時代に目を向けると、そこでもまたさまざまな噂が渦巻いていたことが確認されるだろう。そしてそのような時代に、噂あるいは流言蜚語についての注目も高まっていった。一九三七年に清水幾太郎は「流言蜚語」について論じた書物において、次のように述べている。

> 禁止といふものにも様々な程度があるのであつて、通信や報道の機能に対して全面的な停止を命じることもあるが、検閲方針が或る程度以上になれば、それだけこの全面的な禁止に近づいて行く訳である。過度に厳格な検閲制度といふものは民衆に何時も飢ゑを感じさせるものである。
>
> この飢ゑといふものが流言蜚語の発生に最も好都合な地盤なのである。この飢ゑがあつてこそ流言蜚語はその芽を吹くことが出来るのであり、各方面に伝播しながら伸びて行くことが出来るのである。(9)

「禁止」が「飢ゑ」を生み出し、それが「流言蜚語」を発生させる。この書物が刊行された一九三七年には支那事変（日中戦争）が開始され、検閲も強化されていく。それとともに「流言蜚語」が増加し、取り締まりの対象としても注目されていったのだった。もともと関東大震災をきっかけとして「流言蜚語」について考えるようになったという清水が「流言蜚語」のポジティブな側面に注意を向けるのは、そのような時代の動向と決して無関係ではないだろう。(10) 松山巌は、一九四一年度に熊本地方裁判所判事の林善助が報告した「支那事変下に於ける不穏言動とその対策に就いて」(11)を取り上げながら、次のように述べている。

> しかも判例をみると、取り締まりにあたって、〔…〕治安維持法や刑法の不敬罪、不穏文書臨時取締法や出版法、新聞条例、国家保安法などが持ち出されている。もっとも受理件数が多いのは治安維持法違反で三四五一件（うち起訴されたもの一二二九件）、つづいて陸海軍刑法違反で一五二六件（起訴四二七）、全体では五四一五件（起訴一七七〇）である。
>
> 気づくのは、受理した件数と起訴された数との開きの大きさだ。これは何も裁判が被告に対し酌量したとは思えない。むしろ、軽口に近い、ちょっとした言葉でも「不穏言動」とみなして検束したため不起訴が多いと考えられる。

このほかにも警察犯処罰令により「流言浮説罪として警察限りで処理された多数の事件が存在した」と記してあるから、いかに検挙が激しかったのかを物語る。

知人に語った世間話から日記にいたるまでもが対象となっている。すでに民間人はお互いを監視しはじめている。[12]

林が対象としている時期は一九三七年一月から一九四一年十一月までの約四年間であり、そのあいだに五〇〇〇件以上の「流言蜚語」が検挙されたのである。実に膨大な噂が「不穏言動」として取り締まりの対象となっていたことがわかるだろう。そして、大東亜戦争（太平洋戦争）が開戦し、戦局が悪化するとともに、そうした「流言蜚語」はますます増えていった。いわゆる「大本営発表」が隠蔽・禁止していたものを感じ取り、それが伝えようとしないことを伝える噂にすがる人々も少なくなかったに違いない。

『石大臣実朝』が書かれたのは、そのような時代であったのである。妻である津島美知子の証言を引いておこう。

この頃、戦局が次第に進展して、言論出版が、喧しくなつてきてゐましたから、「御所」はいけないといふので、「御ところ」とわざわざ書き直したり、南面といふ言葉で心配したり、いろいろ苦心があつたやうです。そのうへ、「十五年間」といふ短篇にも書いてゐますやうに、「太宰はユダヤジン実朝を書いて、情報局からにらまれてゐる」といつた、今ではばかばかしくて信じられないやうなデマがとんで、私達は、どんなに憤慨したことでせう。十七年の十月に発表した「花火」は全文削除になるやら、この頃は全くひどいことばかりでした。[13]

つまり、『石大臣実朝』という作品自体も不穏な噂の対象となっていたのだ。「ユダヤジン実朝」というのは今では冗談のようにしか思えないが、当時においては必ずしも笑い飛ばせるような話ではなかっただろう。[14]清水が言うように「禁止」が強化されればされるほど、多くの「流言蜚語」が生み出される。真偽不明で、その方向性もさまざまな噂たちによって、人々の疑心暗鬼も増幅されていく。文学作品に対する「禁止」もまた強化される一方であり、太宰の「花火」（「文藝」一九四二・一〇）は、いわゆる反戦的な作品では全くないにも関わらず、戦時下に不良を描いたということが理由で、全文削除となったのである。[15]

検閲が強化されるなかで、作家や評論家はどう対処したか。たとえば中島健蔵は次のように述べている。

書く以上、書きたくないことまで書かなければ沈黙を強いられる。それでも書き続けるに当つて、やはりいろいろのニュアンスがあつた。書きたくないことは最小限度にとど

めておく。あるいは、気がつかないように他のところで打ち消しておく。一方、思い切つて、書きたくないことと心中してしまつて、その代わり、本来ならば書かせられないようなことを盛り込んでしまう。[16]

検閲による「沈黙」を避けるための方途として、中島は「書きたくないこと」も書かなければならなかったのだと語る。しかし、その「書きたくないこと」以外のところに著者の本当に書きたいことがあることに注意しなければならない。そのような文章を読む際には、また一定の方法が必要となるだろう。中村真一郎は次のように説明している。

例えば、或る学者の戦争中の著作が、明かに、戦争協力を謳つていても、それを読む人の大部分は、その著者の従来からの思想が、反帝国主義、反戦主義であることを知つており、その著作の戦争協力的な言説の部分は飛ばしてしまつて、専らそこに提出されている事実のみを読み、その事実の集積の背後に、著者がかなり明らさまに匿してゐる結論を読み取る、と云うようなことが行われた。その場合、その書物は、著者と読者との関係に於いて、誤解はなく、唯、出版上の便宜に軍国主義が仮装されていた、と云うにとどまる。これは最も極端な一例である。[17]

中村は、一見「戦争協力的な言説」に見えるものでも「かなり明らさまに匿してゐる結論を読み取る」ということが行なわれていたのだと言う。つまり戦時下の言説は、表層に惑わされないで深層を読む必要があるというのである。しかし問題は、深層を的確に読み取ることは容易ではないし、むしろきわめて難しい場合が少なくないということだ。実際、中村は続けて、「何らの知識もない、無邪気な読者に過ぎなかつた僕などは、戦争中に於ける知識人の言行の大部分は、今もつて、何処にその本心があつたか捉えられないでいる」と告白している。

戦時下の言説の特徴が表層と深層との乖離にあるとすれば、太宰こそはそうした言説の特徴を最もうまく利用した作家ではなかったろうか。表層においては同時代の言説に寄り添いながら、しかし深層においては、それとのズレを生み出していく。そうしたアイロニカルな所作こそが戦時下の太宰作品の一番の魅力となっていたはずだ。[18]そして、『右大臣実朝』こそは、そうした戦時下の言説のあり方を内部にうまく取り込むことによって、太宰作品のなかでも特に複雑な語りのあり方を生み出した作品に他ならないのである。

四、〈意図〉と〈意味〉

戦時下の言説が探るべき深層を内部に生み出したのは、もちろん検閲という存在抜きには語れない。では、「私」はなぜ深層を探ることを禁止し、また密かにそれを奨励するのか。言いか

えれば、「私」は何を恐れているのだろうか。そのことについて考えるためには、やはり聞き手の存在を無視することは出来ないだろう。

実朝の死後すでに約二〇年、表舞台から去った「私」のところに来て、実朝について聞くこの人物は、いったい何者なのだろうか。もちろん、作品内には何も明記されていない以上、確固とした答えを提出することはできないが、ある程度の推測をすることは可能だろう。一つ考えられるのは、「吾妻鏡」の編纂に携わっている人物ではないかということだ。

「私」は「吾妻鏡」の本文を見ながら語っているわけではない。実朝の死後約二〇年の時点では、まだそれは成立していないのだから。[19]「吾妻鏡」がなぜ編纂されたのかという点について、いまだ正確なことはわかっていないが、北条氏の周辺にいる者たちによって編纂されたのは間違いないと思われる。「将軍記の性格とともに、執権記の性格をも担っていた」[20]とも言われるように、「吾妻鏡」が北条氏の事績を多く語っていることはそれを裏付けているだろう。

ということは、「私」の目の前にいる聞き手は、北条氏の周辺の人物だということである。また、聞き手が「吾妻鏡」の編纂に携わっている人物ではないにしても、単に趣味のために実朝の話をこんなにも長々と聞いているとは考えづらいことから、何らかの政治的な〈意図〉を持った人物だと思われる。二〇年という歳月は決して短くはないが、しかし完全に過去の生々しさを拭い去ってしまうほど長くもない。「私」もまた、聞き手の〈意図〉を図りかねながら語っているのではないだろうか。

「私」が実朝との距離を強調し、その内面を全くわかっていないかのように語っているのは、実際にそうだったからなのか、あるいは何らかの〈意図〉によるものなのか。「私」が政治性をあくまでも忌避しながら、しかし北条義時を「下品」という言葉で批判するのは「私」の本心なのか、それとも「私」が聞き手の前で何らかの危ない綱渡りをしていることを示しているのか。あるいは、「私」は実朝について、結局どのように考えていたのだろうか。表面的な実朝賛美をそのままに受け取れないことは明らかだとしても、「私」が実朝に好意を抱いていたのは確かだろう。しかし、それが一切の批判を許さないような強い愛情と言えるようなものだったのかどうかという点になると、とたんに判断が難しくなる。「私」の実朝評価が合理的解釈を拒むほどの混乱を見せるのも、「私」が自身の実朝への思いを整理できていないからなのだろうか。それとも、彼にとっての実朝の思い出を、聞き手やその周辺の人物たちに都合よく利用されないためなのだろうか。[21]「私」の〈意図〉についてはいくつかの解釈が可能だが、それらのうちのどれが正当な解釈なのか、それを判断する基準はどこにもない。一貫しているとは言えず、相互に矛盾もしている「私」の語りの断片は、その〈意味〉を確定してくれるはずのコンテクストを欠いたまま、宙づりにされざるをえないのである。

そして、『右大臣実朝』という作品の〈意味〉を考えるためには、この「私」の語りと「吾妻鏡」の本文とを並べて掲げる者〈編纂者〉の〈意図〉についても考える必要があるはずだ。「私」の語りと「吾妻鏡」の本文とは同じ出来事を語っていても、微妙に異なるニュアンスを醸し出しているのであり、そのズレから読者はさまざまな〈意味〉を受け取るはずである。たとえば、「吾妻鏡」の承元三年一一月四日の項には、「小御所東面の小庭に於て、和田新左衛門尉常盛以下の壮士等切的を射る、是弓馬の事は、思食し棄てらる可からざるの由、相州諫め申すに依りて、興行せらるる所なり、故に勝負有る可しと云々」とあるのが、「私」によれば以下のようになる。

十一月の四日に、御ところのお庭に於いて弓の大試合がございましたけれど、これは相州さまがたつた一言、お歌も結構ですが、とおつしやつたところが将軍家はすぐに、弓の試合を仰出され、相州さまはかしこまつてそのお支度におとりかかりになつたといふだけの事でしたのに、これをまた例の如く悪推量する者があつて、将軍家が相州さまからきつく諫言されてしぶしぶ弓の試合を仰出されたといふ噂が一部に行はれたやうでございました。本当に、御当人同志はなんでもないのに、はたでわいわいあらぬことを騒ぎ立てるので、つい妙な結果になつてしまふ事がこの世にはままあるものでございます。

つまり、「吾妻鏡」においては「相州諫め申すに依りて」弓の試合が行なわれたと書かれているのだが、「私」はそれを「悪推量」であると否定するのだ。これについても、いくつかの解釈が可能であろう。「吾妻鏡」の記述のほうが実態に沿っているのか、「私」の主張のほうが正しいのか、あるいはどちらも間違っているのか。それらのうち、どの解釈が妥当なのか判断することは容易ではない。

また、実朝の死を語る末尾においては、もはや「私」は何も語らず、ただ「吾妻鏡」「承久軍物語」「増鏡」の本文が引かれるだけだが、[22] それらに描かれた内容も、それまでの「私」の語りと照らし合わせると、さまざまな〈意味〉を産出するはずだ。たとえば、「承久軍物語」の引用中の「阿闍梨公暁、父のかたきを討つと名乗られつるといふ事ありて」という箇所は、「私」の語りのなかで「死なうかと思つてゐるんだ」などと言いながら実朝その他周囲の人間に侮蔑の視線を向ける公暁の姿とは容易に結びつきそうにない。あるいは、実朝を暗殺した公暁が三浦義村を訪ねた場面での「義村、大きに呆れ、日頃将軍家御恩厚く被り奉れば、今更いたはしく思ひ」という箇所についても、「私」の語りに現れる「裏切者」で「御卑怯」な義村を知っている者からすれば、いささか首を傾げざるをえないところだろう。[23] そもそも、「私」が実朝の最期について語っていないということも、確定された事実ではない。それはただ単に編纂者によって引用されていないだけかもしれないのである。想像をた

くましくすれば、「私」は最後の最後で一線を踏み越えてしまったのではないか、と考えられなくもない。

さらに言えば、編纂者の〈意図〉のさらに上位には、作者太宰の〈意図〉も控えている。つまり、この作品は、「私」の〈意図〉、聞き手の〈意図〉、編纂者の〈意図〉、作者太宰の〈意図〉、といったさまざまな〈意図〉に取り巻かれているのであり、それらの〈意図〉はそれぞれにズレを含んでいるだろうし、またそのうちのどれか一つとこの作品の〈意味〉がぴったり重なるということもないだろう。

「どうやら、〝実朝論の時代〟とでも呼ぶべき季節があるらしい」と言う小笠原賢二は、その一つとして「昭和十年代末期」を挙げている。[24] 言うまでもなく、太宰の『右大臣実朝』を初めとして、小林秀雄の「実朝」（『文学界』一九四三・二～六）や斎藤茂吉の『源実朝』（一九四三、岩波書店）が発表された時代である。そして小笠原は、「実朝の悲劇的な生と短歌が、逼迫した時代に身動きならずからめ取られたインテリゲンチャにとって、自己仮託し自己確認するための恰好の対象となったようだ。避けようもなく血腥い時代を生きる知識人の自己省察、自己画定の場として実朝の生きた中世の時代はあったと思われる」と指摘している。

たしかに小林秀雄の「実朝」に関していえば、そのような指摘はあたっているかもしれない。「自己省察」というよりは「自己慰藉」とでも言ったほうが適切だと思われるが。だが、そうした表面的には政治から逃避しているかに見えるインテリのだらしない自己慰藉が、ある種の政治的効果を実際に発揮していたことはやはり見逃せない。たとえば、小林は実朝の「山は裂け海はあせなむ世なりとも君にふた心わがあらめやも」という和歌について、次のように述べる。

> 金槐集は、この有名な歌で終つてゐる。この歌にも何かしら永らへるのに不適当な無垢な魂の沈痛な調べが聞かれるのだが、彼の天稟が、遂に、それを生んだ、巨大な伝統の美しさに出会ひ、その上に眠つた事を信じよう。こゝに在るわが国語の美しい持続といふものに驚嘆するならば、伝統とは現に眼の前に見える形ある物であり、遥かに想ひ見る何かではない事を信じよう。

「巨大な伝統の美しさ」、「わが国語の美しい持続」という言葉で小林が行なっていることを、単なる自己慰藉と言うことはできないだろうし、ましてや自己省察などでは断じてない。まさしく小林は美学的に戦争に――「君」（天皇）の名のもとに行なわれた戦争に――加担していたのである。そして小林以上に「伝統」を称揚していたのは、太宰とも浅からぬ縁がある保田與重郎であった。『後鳥羽院』（一九三九、思潮社）の増補新版（一九四二、万里閣）の前書きにおいて、保田は次のように記している。

初め本書が上梓された頃を思へば、時勢は一変した感がある。著者は初版の序文に於て、わが皇紀の新世紀初頭に、世界史の変革を期待し熱祷したが、正に皇軍は神のまに〳〵それを顕現し、我々の伝統の神がたりこそ、日本の原理なる意味も一段と切実になった。

皇神の古の道は明らかに、御民総てがそれを奉じて己が生命の原理とする日が来たのである。著者はその道を生命の原理としてきた近古以後の詩人の生成の理を語り、日本文学史観と詩人観を明らかならしめる為に著した本書が、此の日再版の機会を得たことを欣び、新しい増補によつて、本書の歴史観をさらに強め得たことを信ずるのである。

増補新版において初めて収録された「承久拾遺」において、保田は「この実朝は若年の人であつたが、動乱の時代を生きた一人物であつた。後鳥羽院の御計画に志を合せたといふ伝説も有力なものとしてあるが、〔…〕実朝の山はさけ海はあせなむのやうな歌にもとづいて、さきの方の伝説に加担する人が今では多いし、またいつだつてさうである方がよいに決まつてゐる」とし、後鳥羽院を承久の変に駆り立てたのは「実朝の死」であったと断定している。この時代において、実朝というアイコンがどのように利用されていたのか、その一端がうかがえるであろう。[25]

太宰の『右大臣実朝』を、小林や保田のような美学的な――それでいて実際はきわめて政治的な――実朝表象の同類とみなすことほど馬鹿げたことはない。この作品における実朝は、いくつもの不透明な〈意図〉に取り巻かれて、きわめて茫漠とした姿をさらすに過ぎないのだから。実朝に対する美学的な解釈を行なえるのは、この作品の異様さに目を瞑った者だけなのだ。ここにあるのは、作品を読むことを、あるいは〈歴史〉について考えることを自己慰藉の手段とするような、とめどもなく自堕落な在り様に抵抗するような何かである。少なくとも読むことの倫理に無自覚ではいられない者にとって、『右大臣実朝』という作品を容易にわかった気になることなど出来はしないだろう。

井口時男は「太宰のイロニーはあげて「無垢」にして「無心」なるものの価値上昇のために行使されるのであって、「無垢」にして「無心」なるもの自体はイロニー（反語・皮肉）の対象にはならない」[26]と指摘しているが、それはあまりにも太宰作品のアイロニーの射程をみくびった見解であると思われる。実朝を「天衣無縫」な存在に持ち上げる「私」の所作がそれほど単純なものではないことは明らかであり、だとすれば同じく「私」が「御朝廷の尊い御方々」に口をきわめて賛辞を呈するのもまた、何らかの〈意図〉が介在しているようにも思われてくるだろう。はたして実朝も、「御朝廷」も、それほど「「無垢」にして「無心」」なのだろうかという疑問も読者の胸には兆してくるはずだ。

安藤恭子が指摘するように、『右大臣実朝』が扱う「題材は、

「朝廷」を絶対視する「実朝」も、また、その〈崇敬〉の対象であった「御所」さえも、政治的葛藤の一要素としてしか存在し得ないことを、まさにアイロニックに示し得るもの」[27]でもあった。とするならば、この作品を書いた太宰の〈意図〉についてもさまざまな推測が可能となってくるであろう。ただし、そうした〈意図〉は単一のものに回収されはしない。それはあくまで複数のままに留めおかれるのだ。

「いつも大多数派であるふりをしてゐる、大衆と一しよになつて声を合はせて合唱をやつてゐる、俗衆の先頭に立つて何食はぬ顔で音頭さへとつてゐる――しかしさうしながら、実は、あらゆる通念、正統、権威を瓦解させ、嘲弄してゐた」「イロニスト〈反語家〉」としての戦略を示唆する林房雄は、次のようにその危険性を指摘することを忘れない。

> 反語家はその本質上、誤解されることを避けえません。しかし、彼は平気でそれを甘受し、否、ひそかにこれを快としてゐるほどに悪魔的でさへあります。反語家の真の危険は、外部からスキャンダル呼ばはりされて立場を悪くするといふやうな点にあるのではなく、むしろ内部において一種の心理的陥穽におちこむことが往々にしてあるといふことです。反語家は時とするとジキル博士とハイド氏のやうなものである。彼の仮面が第二の性質となり、それがあまりに〈彼の役割の皮膚〉のなかに穿入しすぎて、その第一と第二の性質の間を往復してゐるうちに、どつちがよりほんものであるかがわからなくなつてしまう。[28]

アイロニーを行使する者は、「仮面」〈表層〉がいつの間にか深層に浸潤していく危険性と常に隣り合わせだ。『右大臣実朝』の朝廷賛美を、単なる偽装であり、太宰はそのようなことを全く思っていなかった、と断言するのも、それと反対の主張をするのと同様に、やはり躊躇われるに違いない。[29]そして、そのような問題を考える際には、太宰の〈意図〉とこの作品の〈意味〉とは必ずしも同一ではないということもまた心に留めておく必要があるだろう。

『右大臣実朝』は、さまざまな〈意図〉に取り巻かれながら、読者を惑わし続ける。しかしながら、その異様さが醸し出す魅力に惹かれて――少なくとも私は――これからもこの作品を繰り返し読み続けることになるだろう。

注

（1）吉本隆明『源実朝』（一九七一・八、筑摩書房）

（2）野口武彦「三人の実朝」（「海」一九八三・四）

（3）木村小夜「「右大臣実朝」――近習と公暁」（「国文学」二〇〇二・一二）

（4）ポール・ド・マンが『読むことのアレゴリー』（二〇一二・一二、岩波書店）で鋭く指摘するように、字義的解釈と比喩的解釈の境目は通常思われているほどはっきりしているわけではない。

（5）大塚久『将軍実朝』（一九四〇・一一、高陽書院）は、「北條時政の執権時代は、義時は寧ろ実朝擁護の立場に在つた」のだが、「建保の二年三年、殊に同四年頃から、実朝は俄に自ら将軍の権威を張らうとし、そして義時との間に互に摩擦を生ずるやうな事情になつたのではあるまいか」と推測している。ちなみに、同書は太宰が『右大臣実朝』執筆にあたって参照したのではないかと推測されている。島田昭男「右大臣実朝論――その成立事情を中心に」（『批評と研究　太宰治』一九七二・四、芳賀書店）、山内祥史「解題」（『太宰治全集　第五巻』一九九〇・二、筑摩書房）、嘉数弓子「歴史小説「右大臣実朝」執筆参考資料をめぐって」（「太宰治」七、一九九一・六）などを参照。

（6）森井直子「『右大臣実朝』試論――歴史記述との出会い」（『新世紀太宰治』二〇〇九・六、双文社出版）

（7）木村前掲論文

（8）権錫永「アジア太平洋戦争期における意味をめぐる闘争（4）――太宰治『右大臣実朝』」（「北海道大学文学研究科紀要」二〇〇三・二）

（9）清水幾太郎『流言蜚語』（一九三七・一二、日本評論社）

（10）松原隆一郎「解説」（清水幾太郎『流言蜚語』二〇一一・六、ちくま学芸文庫）は、「流言飛語の擁護は朝鮮人虐殺に憤った彼の体験からすれば意外ではあるが、震災直後ではなく軍部の権力が異様な高まりを見せつつあった頃に綴られた文章であればこそ、清水は流言蜚語に対して検閲すらすり抜ける批判的言論としての役割を期待したのであろう」と述べている。

（11）『社会問題資料叢書　第一輯「支那事変に関する造言飛語に就いて」「支那事変下に於ける不穏言動と其の対策に就いて』（一九七八・八、東洋文化社）

（12）松山巌『うわさの遠近法』（一九九三・二、青土社）

（13）津島美知子「実朝のころ」（『太宰治全集　付録第八号』一九四九・七、八雲書店）

（14）中谷孝雄「「右大臣実朝」」（『太宰治全集　月報11』一九五六・八、筑摩書房）によれば、そのような噂の発端となったのは芳賀檀であったようだ。

（15）安藤宏「「一般家庭人ニ対シ悪影響」――太宰治『花火』」（「国文学」二〇〇二・七臨増）参照。

（16）中島健蔵「戦争・弾圧・抵抗」（「文藝」一九五二・六）

（17）中村真一郎「芸術的抵抗派」（『昭和文学十二講』一九五〇・一二、改造社）

（18）拙稿「『太宰治全集』の成立――検閲と本文」（「インテリジェンス」八、二〇〇七・四）参照。

（19）八代国治『吾妻鏡の研究』（一九一三・一二、明世堂書店）は、「吾妻鏡」は一度に成立したものではなく、源氏三代の将軍記が文永二年（一二六五）から同一〇年（一二七三）の頃、以後の将軍記は正応三（一二九〇）年から嘉元二（一三〇四）年の頃と、二段階で成立したと推測している。それに対して、五味文彦『増補・吾妻鏡の方法』（二〇〇〇・一一、吉川弘文館）は異議を唱え、一四世紀初頭に全体が一度に成立したのではないかと述べている。

(20) 五味前掲書。

(21) そのように考えた場合は、魯迅の仙台留学時代を描いた太宰の『惜別』（一九四五・九、朝日新聞社）との共通点も見えてくるかもしれない。『惜別』は、魯迅の同級生であった「私」が新聞記者から魯迅の仙台留学時代について取材を受けるが、その後「日支親和の先駆」としてまとめられた記事を読んで、「社会的な、また政治的な意図をもった読物は、あのような書き方をせざるを得ないのであろう」と思うところから、それとは異なる「私の胸底の画像」を書き始めるという形式になっている。

(22) 嘉数前掲論文に指摘があるように、「吾妻鏡」や「承久軍物語」などは『右大臣実朝』に引用される際、ところどころ省略されていたり、加筆されていたりすることには注意が必要である。『右大臣実朝』と典拠との関係に関しては別稿を用意したい。

(23) ちなみに、同時代の歴史学においては、実朝暗殺に三浦義村が関わっていたのではないかという推測がされている。たとえば大塚前掲書は、「一種の傀儡に過ぎなかつた」公暁を操っていたのは「彼の弟子駒若丸か、その父三浦義村あたり」であり、「その操つる糸の本を辿れば、その一端は更に他の何者か、たとへば義時あたりの手に握られてゐたのではあるまいかと疑はれないでもない」と述べている。

(24) 小笠原賢二「痛切な自己確認――'70年前後の文学的転換について」（中野孝次『実朝考――ホモ・レリギオーズスの文学』二〇〇〇・一二、講談社文芸文庫）

(25) 中野孝次『実朝考――ホモ・レリギオーズスの文学』（一九七二・三、河出書房新社）は、「山は裂け海はあせなむ世なりとも君に二心わがあらめやも」の歌について、「三十年前電波にのせられてこの歌がしきりに宣伝されていたころ、これはあの万葉長歌の一節「海ゆかば」や、幕末の書生っぽふうな勤王歌（岩波文庫でさえ『歎涕和歌集』を出していた）と正確に同じ文脈で、つまり「君」にわが命を捧げて悔いない「臣民」の心情を歌ったものとして讃美されていたのだった」と証言している。

(26) 井口時男「イロニーと天皇」（「太宰治研究」八、二〇〇〇・六）

(27) 安藤恭子「『右大臣実朝』――〈死〉と〈崇敬〉のアイロニー」（「解釈と鑑賞」一九九九・九）。ちなみに、現在の歴史学では、実朝が朝廷と深く関わるようになったのは政治的な効果を狙ったものだったとするのが一般的であるようだ。たとえば、五味前掲書は「和田合戦で痛手を負った政所は、京都・朝廷との関与を強めることにより再建へと動き出していったと考えられる。〔…〕公暁が実朝暗殺に失敗したところで、第二、第三の死角が放たれたであろうことはまちがいない。それだけ実朝による将軍権力の強化が異様に進行していたのである」と推測しているし、坂井孝一『源実朝　「東国の王権」を夢見た将軍』（二〇一四・七、講談社）も「後鳥羽の支援は、将軍親裁の強化に取り組む実朝にとって心強いものであった。現実的にも大きな政治的効果を発揮した。〔…〕義時・広元らにたいする姿勢を安定志向の協調から、積極的な攻勢へと転換したとみることもできよう。その意味で、建保四年という年は明らかに一つの画期であった」と述べている。

(28) 林達夫「反語的精神」（「新潮」一九四六・六）

(29) 『右大臣実朝』には二つの派生作品がある。「鉄面皮」（「文学界」一九四三・四）と「赤心」（「新潮」一九四三・五）である。小林の「実朝」が連載中の「文学界」に発表された前者は、『右大臣実朝』の予告編といった体裁を取りながらも、

表層と深層の関係をさまざまなレベルで描いており、示唆に富む。たとえば、在郷軍人の分会査閲に参加した「私」は、査閲官の老大佐から「召集がなかつたのに、みずからすすんで参加いたした感心の者」として皆の前で激賞される。「みんなを、あざむいてゐるやうな気がし」たと「私」は言うのだが、表層的には模範的な国民とみなされてしまう「私」は、深層においては果たしてどのような存在なのだろうか。しかも、そのすぐあとに、実朝が公暁に「学問ハオ好キデスカ」「無理カモ知レマセヌガ」「ソレダケガ生キル道デス」と言う『右大臣実朝』の場面が引用されるのは、さまざまな憶測を誘うところであろうし、「鉄面皮」というタイトルもまた、困難な時代のなかでの「私」の生きる指針を示しているようにも思われてくるだろう。だが、後者は実朝の尊皇精神を描いた一場面をほぼそのまま（完成稿とは若干の異同がある）抜き出したもので、これだけ読むとアイロニーは少しも感じることが出来ない。「ユダヤジン実朝」問題に対する対抗策であるとも考えられるが、前者とは方向が正反対にも思われる後者のような文章を発表する太宰の〈意図〉はなかなかに定めがたいのである。